

## 人々に注がれた贈り物

(主の昇天)

主イエスの一つひとつの神秘は、多くの面をもったダイヤモンドのように、さまざまな光を放ちます。その光をわたしたちの生活に受け入れるなら、主の生き方を映し出すものになっていくでしょう。

今日は主イエスの昇天の祝日です。聖パウロは、エフェソの信徒に送った手紙の中で、詩編 68 (7-13) に照らし合わせて、主の昇天について驚くような解釈をしています。詩編 68 は、人間の歴史の中にどんどん広がる勝利のように、神の救いが表されています。神は、人間によって引き起こされる妨げを乗り越えながら、ご自分の道を開いていかれます。神は、エジプトから解放したご自分の民のために、住まいを準備しようと思われたのですが、その土地は、他国を征服して得られたものです。神によって約束の地へ道が開かれていくとき、民は協力してその道を歩み、勇気をもって戦わなければなりません。他国の多くの王が戦いを挑んできますが、神の計画に対する抵抗は空しく、結局皆逃げ去り、豊かな戦利品が残されます。こうして民は勝利を重ね、エルサレムまでに上って、そこに契約の櫃が置かれます。エルサレムの征服と戦利品を分配するイスラエルの民の勝利にたとえて、聖パウロは、主イエスの一生涯をある意味での戦いのように捉えています。もちろん、その戦いは、エルサレムの征服ではなく、ご自分が神の子として属する住まい、また、全人類が到達すべき永遠の住まいを勝ち取ることにつながるのです。復活の勝利と昇天の結果、「戦利品」、つまり、他のいっさいの賜物を含む聖霊という崇高な贈り物をわたしたちに注がれるのです。

一方、主のご生涯を一つの戦いとみなすなら、その中には二つの側面が見いだされます。まず一つは、すべてを崩壊させようとする悪、聖書の中でサタンと呼ばれる悪霊との戦いです。その霊は人間の歴史の中で強力に働いています。なんとかしてすべての神のみ業を取り消そうとします。中でも最も偉大なみ業は、御父がわたしたちに御子を与えられたことです。そこで悪の力は、イスラエルの祭司たち、長老たち、ファリサイ派の人々の心に入って、彼らを通して、イエスを死に至らせました。しかしその結果は、悪霊の敗北に終わりました。それこそわたしたちに疑問を起こさせるものです。つまり、悪霊はキリストの死によって敗北し、暗闇の世界が消えるのを知っていたのか、知らなかったのかという問いです。もし知っていたとするなら、悪霊はもっとも愚かな者ということになります。賢明なら、キリストの死が避けられる術を見つけたことでしょう。それを知らなかったと言うなら、悪霊はルールを知らないゲームをやっていたということになります。その板挟みからの出口があります。それはイエスのアイデンティティと悪霊のアイデンティティに見られるものです。つまり、悪霊は神の知恵を悟れません。御父に死ぬまでへりくだって従われた主イエスの前で、傲慢から生まれた悪霊の知性の光は、暗闇になってしまいます。牛は赤い布を見ると、突進せずにいられないように、悪霊は聖なる者の前で、その命を抹殺しようとせずにいられないのです。しかも、ナザレのイエスは、単にモーセのような聖なる預言者ではなく、神の聖性そのものが宿っておられる人間です。ですから、イエスはこの世に生きておられた間、言わば戦争状態の中におられたのです。さまざまな形で悪霊に遭い、最後に殺されましたが、それによってこそ、闇の王国は痛手を受けました。つまり、イエスの戦いの一つは、悪霊との挑戦だったのです。

他方、旧約聖書の中には、祈りが神との格闘であることを暗示する、ヤコブのエピソードがあります。彼はカナンの地から逃れて、先祖の国であったハランに赴きます。そこで妻をもら

い、ラバンという伯父に雇われますが、数年後、家族と一緒にカナンに戻り、ヤボクという渡しを渡って、独り後に残っていたとき、何者かが夜明けまでにヤコブと格闘しました。ヤコブはその人のうちに神を認め、祝福をもらうまではその人を離しません。言わば祝福を奪い取ります。このエピソードの中には、ユダヤ教とキリスト教の伝統に見られる霊的な格闘のイメージ、偉大な賜物を得ることのできる粘り強い祈りの姿が見られます。その観点から言うなら、主イエスの一生涯は御父との格闘であったと見ることができます。主はメシアとしてのご自分の課題を果たすために、二つの道があると理解しておられました。サタンの道と御父の道です。サタンが勧める道は、この世における成功を中心として群衆の表面的な喝采を求め、受けた賜物を自分の利益のために使うことです。反対に、御父の道は、受難と十字架の死と復活の道です。御父の道とは異なるあらゆる道を拒絶するために、そして御父の道を最後まで歩み通す剛毅を受けるために、主はどうしても祈りを必要としました。神でありながらも、ナザレの人イエスは、祈りに頼らずには、御父が永遠から人間となられたご自分の子のために、定められた救いの計画を選ぶことも、それを全面的に生きることも、できなかつたに違いありません。したがって、主イエスの一生涯の格闘は、憎しみや絶望へと誘い込むサタンと御父の愛との葛藤でした。その結果主は、人類が時の旅を終えて住むべき永遠の住まいを獲得されたのです。

イスラエルの民のエルサレム征服には、見事な戦利品が伴いました。ですが昇天される主イエスに伴う戦利品はいっそう見事なものです。すなわち、死ぬべき主の体は不滅をおびておられるので、その神秘体に属する私たちも、不滅の体を受けることとなります。主はご自分の死によって死に打ち勝ちました。かつて罪の罰であった死は、時間と永遠の境界線を超える案内者となり、アシジのフランシスコが歌う姉妹のようになりました。さらに主の死はサタンに対する勝利を収めました。なぜなら、主は憎しみに対して愛で、不正に対して忍耐で、裏切りに対してゆるしと友情で応えられたからです。それで見事な戦利品を受けられた主は、わたしたちをそれに与らせてくださるのです。聖霊をいただくことによってわたしたちは、主が歩まれた道を歩むことができるようになり、使徒たちを通して主から受けた命令、つまり、全世界に福音を伝えることができるようになりました。わたしたちの課題は、生活全体を主の良い知らせに変えることにあります。もし聖霊に教えられて、憎しみに対して愛で応え、不正に対して忍耐で応え、裏切りに対してゆるしと友情で応えることができるようになるなら、わたしたちの生活は生きた福音になります。その福音とは、主が復活して共に生きてくださり、わたしたちの罪がゆるされ、聖霊が教えてくださる永遠の生命へと導く道を歩むことなのです。

J. E. ペレス・バレラ S. J.